氏　　名	：	福地　真弓
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博乙第 94 号
学位授与年月日	：	平成３０年３月１６日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第２項該当　論文博士
学 位 論 文 名	：	メルロ＝ポンティの現象学的教育学研究序説 ――　『行動の構造』『知覚の現象学』から「ソルボンヌ講義」へ　――
論 文 審 査 委 員	：	（主査）　教授　下城　一 （副査）　教授　大友　秀明　　准教授　鈴木　朋子 教授　有元　典文　　教授　竹内　裕一 教授　重松　克也

学 位 論 文 要 旨

理性的なコミュニケーション概念に対する疑念から筆者は、教育哲学における身体論の在り方を巡り、メルロ=ポンティ思想を研究対象とした。その過程で、従来の日仏のメルロ=ポンティ思想研究が、「定説」　――　メルロ＝ポンティは「後期」にそれまでの「初期」「中期」の思想を「自己批判」し、ハイデガー存在論思想へと深化した　――　のため、教育哲学までが「中期」メルロ=ポンティが行った教育学・児童心理学講義「ソルボンヌ講義」を等閑視してきたことを知ることになった。「定説」の誤謬を検証し（序論）、改めて「初期」『行動の構造』『知覚の現象学』からのメルロ＝ポンティ現象学の全面的発展として、「ソルボンヌ講義」を読み直すことを本論文の主題とする。その十全な評価と理解により。メルロ＝ポンティ自身の本来の「教育学」の現象学的見通しを明らかにして、教育学における身体論思想の応用を改めて考え直す序説としたい。

先ず、『知覚の現象学』「序文」を読解し（第一章）、現象学の基本的スタンス（近代科学・世界観批判）を解明し、メルロ＝ポンティが、先行のフッサール・ハイデガー思想を批判して、「行動の発達」を非因果論的な「構造」の体系と捉えるとともに、コギトを「透明」な「自我」の自己同一性（「「我」=「我」、即ち反省」概念、）ではなく、「我」-「他者としての我」であること　――を解明したことを確認した（これらが「ソルボンヌ講義」読解の鍵となる）。

第二章で、それが『行動の構造』での、ゲシュタルト心理学、「ゲシュタルト」＝「知覚」における「図 - 地」構造の理解から得られたことを遡って解明し、「恒常性仮説」を原理とする近代科学的世界観が「生きられた世界」を把握不能にしている実相と、「行動の発達」の外部観察者的な解明に、構造論上の限界があること、「意識」段階以上は、内部的に「記述」し直す必要があり、それが『知覚の現象学』の課題であることを確認した。

『知覚の現象学』「序論」、「第一部　身体」の読解（第三章）から、メルロ＝ポンティが「錯視」「幻影肢」等の解明により、「知覚」の実相に立ち戻って、「身体」すなわち「知覚」の、「環境 - 主体」、「能動 - 受動」の相互反転的な一体的体制を見出し、また「大脳欠損」による「意識失調」（「シュナイダー症例」）の、物心二元論を排した解明により、「生の志向性」を本質とする「意識」「知覚」と、従来「物質的」とされてきた「身体器官」との関わりが考察され、身体の運動性が始

源的空間性を生み出し、また科学的理性主義が分断追放した情動性がむしろ「知覚」の始源の本質であり、その上に始源の言葉の、身体との反転関係も成立することを見た。

『知覚の現象学』「第二部　知覚された世界」では（第四章)、現象学的「身体」が、不断の「現在」においてある固有の「生の志向」「構造」であり、空間時間、すなわち世界を「地」として自ら拓き、並びに他者、歴史＝精神的世界とともに有限な固有の位置を持つ「身体」、史的「身体」として、また、固有の過去・未来に開かれた未決の展望を持つ「地」でもあることが明らかにされた。本来の「感覚」が、「内 - 外」の区別が初めてそこから現われてくるような、「世界の湧出」としての「感覚」「身体」であり、外面的知覚すなわち世界と自己の身体の知覚とは「同一の作用の二つの面」であることが解明された。

『知覚の現象学』「第三部　対自存在と世界内存在」（第三章）では、「言語」の使用に始まる「語る私」「思惟する私」が新たに検討され、「思惟される私」に対し「対象としての私」が、「対象」としての「不透明性」すなわち「地」の無限の可能性を含む「他者」「沈黙のコギト」として、　歴史、時間に開かれた「私」であり、自己同一的自己意識ではないこと、時間論の再考により、不断の「現在」である「知覚」から、その都度「過去」「未来」が投射され、その生の志向が「不透明性」に無限に開かれていることにおいて、原理的に自由な「私」が、しかし連続性・秩序性を持つ「自然的世界」（「地」）を引き受けながら生きなければならないこと、自由の本来の意味、「行動」が解明されるのを見た。

第一章～第五章で確認された、『行動の構造』『知覚の現象学』を通じて確立された独自の現象学的哲学の視点を踏まえ、メルロ＝ポンティが「ソルボンヌ講義」で、「教育」をどのように捉えていたかを改めて検証すると（第六章)、対として考えられた、講義「おとなからみたこども」と講義「幼児の対人関係」が、「こども」が体験する「世界」が、「大人」が見せている「地」も含めた世界であること、それを文化人類学的、歴史学的知見も含め解明することをメルロ=ポンティは「教育学」と考えていること、また、「大人から見て」「他者」である「こども」を、その体験する世界も含め異なる「構造」として「外部観察的」に解明・推定するのが「児童心理学」であること、双方を循環的に対として考えるのが「本来の教育学」であるとメルロ=ポンティが考えていたことを解明した。

「鏡像」経験の意味を、その限り「内受容的身体性」「癒合的社会」からの分離、自立として推定し、「三歳児の危機」から踏み出して生きていく「こども」達と、「共に世界を見ていく」べきこと、メルロ=ポンティと共に、「地」からの変化を「待つとなく待つ」日常の営みが、教育における「身体」的関わりのポイントである（結論)。